

『なめとこ山の熊』

小十郎は落ちついて足をふんばって鉄砲を構えた。熊は棒のような両手をびっこにあげてまっすぐに走って来た。さすがの小十郎もちよと顔いろを変えた。

ぴしゃというように鉄砲の音が小十郎に聞えた。ところが熊は少しも倒れないで 嵐あらしのように黒くゆらいでやって来たようだった。犬がその足もとに 噛かみ付いた。と思うと小十郎はがあと頭が鳴ってまわりがいちめんまっ青になった。それから遠くで 斯こう云うことばを聞いた。

「お小十郎おまえを殺すつもりはなかった。」

もうおれは死んだと小十郎は思った。そしてちらちらちらちら青い星のような光がそこらいちめんに見えた。

「これが死んだしるしだ。死ぬとき見る火だ。熊ども、ゆるせよ。」と小十郎は思った。それからあの小十郎の心持はもう私にはわからない。

とにかくそれから三日目の晩だった。まるで氷の玉のような月がそらにかかっていた。雪は青白く明るく水は 燐光りんこうをあげた。すばるや 参しんの星が緑や 橙だいだいにちらちらして呼吸をするように見えた。

その栗の木と白い雪の峯々にかこまれた山の上の平らに黒い大きなものがたくさん環わになって集って 各々黒い影を置き 回々教徒の祈いのるときのようにじつと雪にひれふしたままいつまでもいつまでも動かなかった。そしてその雪と月のあかりで見るといちばん高いところに小十郎の 死骸しがいが半分座すわったようになって置かれていた。

思いなしかその死んで 凍こえてしまった小十郎の顔はまるで生きてるときのように 冴さえ冴さえてし、て何か笑っているようにさえ見えたのだ。ほんとうにそれらの大きな黒いものは参の星が天のまん中に来てをもっと西へ傾かたむいてもじつと化石したようにうごかなかった。